特　集

ことばをめぐる包摂と排除

英語のなにが問題で、なにがなされるべきか

国際英語における言語規範の自律化と解放

かどや　ひでのり

1.　問題の所在

ことばをめぐる包摂と排除をかんがえるとき、はずすことのできない問題が英語のもたらすそれである。英語圏を構成する諸国民国家の覇権化にともない準英語圏が拡大され、ゲルマン諸語のひとつにすぎない英語が異言語話者間コミュニケーションのための主要な媒介言語となることによって、世界における突出した優勢言語になっていることは、ここで数値指標をわざわざ確認するまでもない。その結果、英語の運用能力の有無と高低が、たんなる一言語能力の問題ではなく、ますます社会経済的な意味を有するようになっており、その傾向がよわまる気配はない。たとえば、程度はさまざまであれ、初・中等教育のどこかの段階で英語の学習・習得をまったくおこなわないまま、高等教育をうけることは、教育制度の整備された地域においてはごく例外的にしか実現しないであろうし[1)]、高等教育をへることなしに専門職につき、社会経済的に優位な位置を獲得することも、ふつうは困難である（それゆえ例外的成功は注目をあつめる）。最近注目をあつめた研究では、研究成果を英語でかくことが事実上しいられる自然科学の世界で、非英語母語話者が不利益を甘受している現状が実証されている[2)]。同様のデータは、学問の世界にかかわらず、英語使用が標準とされ、非英語母語話者が肌で不利を感じているさまざまな分野でとることができるだろう。

英語という一言語の運用能力が個々人の社会経済的な財の分配に影響してしまう範囲が人類社会全体をおおいつつあることによって、英語によるコミュニケーションへの包摂とそこからの排除は、社会経済的な問題として認識されるようになった。英語の運用能力があれば、よりたかければ、より有利な諸財の分配を期待することができるという現状に無関係無関心でいることはむずかしい。

このような状況のもと、英語の母語話者／第一言語話者とされるひとびとと英語の非母語話者のあいだにある非対称な関係が問題になる[3)]。一般に、英語運用能力を十分にもつとされる英語の母語話者は、英語の運用能力に関して、非母語話者よりも優位にたつ。しかし、言語の運用能力は、教育水準や学習能力にも依存するため、後者が前者をうわまわることもありうる。問題となるのは、母語話者と非母語話者をくらべたとき、別の第一言語の獲得後に英語を習得するひとびとにたいして、母語話者は、母語かつ生活言語としての英語使用者という、英語という言語の規範の根拠を提供・保証する位置——いわゆる記述言語学者らがインフォーマントとしての資格をみとめる位置——にあるものとされることである。実際、この位置に非母語話者がたつことはできないと観念されている。英語母語話者による「それは英語としておかしい／まちがっている／わからない／うつくしくない／そうはいわない」といった言辞は、英語の規範を確認するための根拠とされるが、非母語話者がかりにおなじ発言をしたとしても、それは、単なる言語的未習熟や無根拠な判断としてしりぞけられる。この母語話者と非母語話者の決定的な非対称性こそが上述の社会状況のなかで問題をもたらす。英語が社会経済的な財の分配に影響するにもかかわらず、その英語の使用者相互のあいだに非対称な関係があるならば、それは社会経済的な非対称性へとそのまま複写される。英語が、英語話者もふくめた異言語話者間コミュニケーションの媒介言語として世界中でつかわれるとき、英語母語話者は非母語話者にたいして社会経済的に有利な立場を享受することができ、しかもその立場は独占されている。社会経済的な機会、さらには結果の平等をそこなうこの関係は、近代社会の根本的価値と矛盾する不公正なもの、平等である権利の侵害としてとらえられ、ここに英語は社会的な問題となる。その社会問題としての英語をめぐる議論において、これまで、検討・指摘されるべき